15

「瞬」

一五　★　瞬

深夜のスーパーは、冷えていた。まばらな人影には多すぎるほどたくさんの商品が並び、照明は白く床を照らし、普段の賑わいとは違う、どこか仮の世界にいるようだった。お客として失格かもしれないが、ほしいものはない。家ではない場所で何かを確かめたくてふらりやってきた。

アイス売り場の前で立ち止まる。ここは大型店だからアイスのショーケースひとつとっても種類が膨大だ。なにかを選ぶふり、というと大げさだが、定番アイスの新しい味やコンビニでは売っていないご当地ものを眺めたり、こんな専門店の冷凍商品が出てるんだとほんの少し驚いたりしながら、それなりに過ごす。はたから見ればどれを買おうか悩んでいるように見えるだろうか。ガラス越しに冷気を感じながら、ぼーっと商品棚を見ているが、実は今、耳に少しだけ熱を宿してメロディをなぞっている。イヤホンから流れる、この世界でほとんど僕しか知らないこの曲を聴き終わるまで、ここにいさせてほしいのだ。

気分によって、曲の聴こえ方は変わってくる。場所によっても。スタジオの万全に構築されたシステムの中で、高音質かつ大音量で聴いて「良い」と感じるのは当たり前だと僕は思う。作業の達成感も加味されたらなおさらだ。

真価が試されるのは、ちょっと雑音があり、曲が世界の中心となっていない場所。そして聴く側の気分もどこか「冷めている」くらいの、普段着のようなナチュラルな聴

取スタイルで聴いて、それでも何か心動くものがなければ。自分を冷やすためのアイス売り場なんてあまりに単純なのだが、ともかくそんなわけで今ここにいる。

誰かが扉を開けて、冷気がゆっくりとこちらに流れてくる。湿気の抜けた空気は、夏の手前の夜を思わせた。

曲は進む。曲だけが進む。心はすっと過去に帰っていく。そんな曲なのかもしれない。

歌のメロディーとピアノが入れ替わりになるところで、僕はショーケースの中の商品をさっとひとつ手にとり、そっとその場を離れた。セルフレジに千円札を入れ、おつりがじゃらんと鳴った。これが福音なら嬉しい。

自動ドアを抜けたところで、耳からイヤホンを外す。お店の冷たさとはちがう、夜風がひんやりと、でも優しく、耳の中まで届く。赤信号の色。パッと青に変わった。

——あなたに届いてほしい。

スイカバーを食べながら、そんなことを思った。